日本の笛

民謡集

西條八十著

刊スルア

日本の笛

民謡集

柴小七佐著

民謡集

日本の笛

秋白

笛の本日

民謡集

西條八十著

アルス刊

民謠私論

一

民謠は民衆の言葉を以て歌はれねばならぬ。殊に日本の民謠に於ては足利期以後、德川時代を經た民謠の傳統を決して等閑視するわけにはゆかない。凡てはここから深い根ざしを据ゑなければならない。古くは萬葉催馬樂に溯る可きであるが、內的精神に於ては兎に角言葉の上からはあまりに時代が隔絕してゐる。民謠の言葉は無論その時代の民衆の言葉であらねばならない。言葉が變ると形式が變る。德川時代の二十六字の俚謠調はその當時の口語として最も適當した形式であつた。つまり萬葉の三十一字の精神がこの二十六字に乘り移つた

のである。和歌は古今新古今以後墮落した。で、眞に第二の萬葉と目す可きは却つて德川期の俚謠であつた。

此の德川期の俚謠は未だに日本の民謠として盛んに傳唱されてゐる。而も根本をなしてゐる。今の新らしい詩人間には追分調の如きものが、日本の鄕土から滅びないうちは眞の新らしい詩の革正は出來ないと信じてゐる人がある。然し、私はさうは思はない。それどころか、現代の口語體の詩に於ても、この鄕土的な民衆の言葉から先づ深い薰染を受くる必要があると信ずる。ここから發足しないから、いかがはしい鵺的な飜譯調になるのである。日本には日本の傳統がある。日本には日本の言葉がある。

德川期の小唄は主として「松の葉」を推す。然し、眞の民謠の根ざしは却つて、山野の聲より起つてゐる。馬子唄、船唄、田植唄、麥扱き唄、盆踊唄等、それら自然の響は誰が唄ふとなしに自らにして眞卒な民衆の歌謠を成した。民謠の本質はさうしたものである。民謠は民衆全體のものであつて、たとへ作者はあつても、その歌謠が一旦民衆の手に渡つた以上、最早や民衆のものとなつて了ふ。さうなればなるほどその歌謠は民謠としての光輝ある普遍性を持つ事が立證される。民謠とはさうしたものである。而もなほ民謠は洗練される。あらゆる民衆の口から口に、時と處とを經て、充分に取捨され洗練される。だから今殘つてゐるのは民謠としての本質に叶つた先づ優秀のものと云ふ事ができる。尤も中にはさまでにもないものが殘つてゐる。然し、さうしたものはある特種の地方的愛着がさうさせてゐるのである。民謠は鄕土的のものであるからだ。

民謠の言葉は無論平明である。すぐれた詩の見地から云へば卑俗の野調と云つていい。然し、民衆は主として卑俗である。教養が淺い。童謠が兒童の言葉で作られねばならぬ如く、民謠は民衆の野調であらねばならぬ。その言葉でその人情を歌ふ。これはどうしても、私にしてからが十段も二十段も下に降つてゆく必要がある。私の民謠を卑俗と云ふ人があるかも知れぬ。卑俗で宜しいのである。而もその中に私の藝術があるのである。決して腹からの卑俗になるわけは無い。ただ馬子には馬子の言葉で、漁師には漁師の言葉で、そのまま自己の感動を傳へ、或は彼等の感情を代辯する。それが無くてその歌謠がどうして彼等のものと成り得るか。これを考へてほしいのである。

民謠の革正を叫ぶ人がある。(詩壇では民衆派の人達その他がさうである。)現代の民謠が愈々近代的の思想と感情とに生く可きは尤であるが、形式に於て、

用語に於て、民衆の些の理解をも受け得ないものが、果して民衆のものと成り得るか。これは重大問題であらう。民衆派の人達が如何に民衆の苦と愛とを演述したところで、それが民衆そのものの聲、そのままの詩になり切らぬ以上、彼等はただ啞然として、ただ教壇上の說教者を仰視する態となる。聖フランシスが雀に教を說いた時、やはり雀にも解し易き言葉で說いたであらう。そこから出發しなければ民衆の親友たる事は出來ない。將來の民衆は知らない。然し乍ら現在の一般民衆の中で、現在の所謂新らしい詩歌を理解し得るには少くとも中學程度それ以上の教養を要する。私は上級の女學生向きの童謠や中學程度の民謠は本物でないと斷言する。私のものを私自身で傑れてゐると思ふほどの僑慢心は私に無いが、現在私の童謠は四五歲の子供にわかる。民謠は目に一丁字の無い馬子にもわかる。論より證據には到るところで私の童謠民謠は彼等のものとなつて了つてゐる。私が眼前にゐるのに、作者が私と知らないで、全く

彼等自身のものとして歌つてゐる。さうして遠くから近くから私に歌つてくれる。私から見ると民衆派の人達の彼の散文律の詩や、民謡なるものは却つて紙上の高踏的な演述としか思へない。飜つて詩や歌に於て、極めて藝術至上的高踏的と見做されてゐるにも係らず、その私の作る民謡が却つて民衆のものとされてゐる、この事實は果して何等に基因してゐるであらうか。寧ろ、或は私の方が民衆の詩人ではあるまいか。

民謡は謡へなければならぬ。山野に於て最も自然に謡はれなければならぬ。謡へないで、朗讀するだけのものを民謡として强ひるのは無理である。精神に於て民衆的であればその詩とは云ひ得る。然しその歌謡とは云へない。歌謡は特別なものである。民衆派の人達にしてからが、酒間酣にして歌ふは、その詩の朗讀より、却つて德川期以後現在に到る民謡の野調である事は常に私の知るところである。それは極めて自然の事であると共に、それはまた民謡の根ざしそのものがどれだけ深いかを思はせる。すでに敎養ある詩人そのものがさうであつたら、無智文盲の馬子や百姓が果してどれに奔るかは考へなくともわかる事である。

もひとつ、棄石を押すならば、人間の感情ならば人間に理解され得る。ただそこに何等かの障碍がある、その時こそは、その表現方法に何かの無理がある時でなければならない。だから民謡の表現は純粹に民謡としての表現を俟たなければならない。

三

曾て、明治の詩壇にも民謡或は童謡風のものが、その三十年代の下半期に行

はれた事がある。かの『文庫派』の中の或人達のがさうであつた。

これらは、然し、眞の民謠或は童謠と云ふには可なり本來の意味から逸れてゐた。委しく云へば、主として在來の新體詩調の文語體を以て田園の風物をや卑俗に叙述したものであつた。而も一種の俳諧趣味を念としてゐた。で、その俳味に富んだ點は他の新體詩とは些か趣を異にしてゐたが、純然たる民謠と目するにはその根本義を謬つてゐた。中には在來の口語の民謠體を用ゐたものもあつた。然し、これも調子ばかりで、その調子に於ても眞のリズムに於て生きてゐたとは思へなかつた。それにその材料のみが田園的であると云ふだけで民謠或は童謠に對する眞の自覺は無かつたと云つていい。

今日、童謠の隆盛を見、民謠の勃興を來さむとする秋に當つて、それらは曾ての儘の姿で復活しようと爲ても謬りである。今日の童謠乃至民謠はもつと根本の自覺の上に立つてゐる。決して明治三十年時代のそれらと同じで無い。

それから、今日、或る種の人々の作に成る民謠と云ふものを見るに、單に田園の風物或は生活を材料にしただけの詩が多い。これらは田園詩とは云ひ得るが民謠とは云ひ得ない。たとへ、それが表現の上に於て世の民謠風を用ゐたとしても、田園の感情、乃ちその風物と農人との混融した生活感情そのものがその儘純化されてゐない場合には眞の田園の民謠では有り得無い。要はその精神である。外から離れて叙述したものでなく、内から燃え上る民衆の叫びが民謠と成るのである。

これは兒童とその生活とを單に題材にした丈の詩が、決して童謠とは云ひ得ない如くである。

四

民衆そのものの叫びが民衆相當の歌謠の體を爲した、これが民謠である。

で、曩に云つた如く、根本に於てその表現を謬つた散文律の演說口調の詩は民謠で無い。と等しく、その風物生活等の外面的叙述の詩は民謠では無い。

民謠は外形に於て純粹なる彼等の言葉を以て謠はれ、その本質に於ては常に彼等の感情そのものであらねばならない。

民謠は常に民衆の藥味であり、酒であり、情愛であり、涙であり、笑であり、血であり、鹽でなければならない。畢竟するに民衆そのものの藝術であらねばならない。

民衆はややともすると、その宗教をさへも娛樂する。彼等は矢張り彼等の藝術を持たなければ慰められ無い。本來民衆は野性で素朴ではあるが、時代の進轉に從て、その生活感情が愈々複雜になる。無論近代に於ては近代の思潮に感

染してゐる。而も愈々彼等がその藝術を熱望する事はその日常生活の險惡を美化し眞實化し慰安する唯一の憧憬である。彼等は、然し、主として彼等自身にその思ひ通りの藝術を作れない。時とすると彼等の中に無名の即興詩人があらはれる。彼等は爭つて彼を歡迎し圍繞する。然し、それでもまだ滿足できない。殊に現在では在來の即興的民謠よりもつと美くしいもつと高いもつと複雜したものを要求せずにはゐられなくなつてゐる。私が曾つて葛飾の或る寒村にゐた時に、毎夜のやうに庭の木戸から這入つて來る頰冠りの若い衆達があつた。そして『唄はできてるかい』である。彼等は歌謠に飢ゑてゐたのである。で、私は『できてるよ』と云つて、一つ二つ書いてやる、それは喜んですぐに歌ひ乍ら出て行く、而して月の夜、螢の飛ぶ星の夜など、向うの川べりや田圃道を勝手に彼等の歌ひ慣れた追分や盆踊唄や都々逸などの調子に移しては流して歩くのだつた。その時、私の小唄そのものは既に彼等自身のものとなりきつてゐ

た。畢竟するに、私は彼等の歌はうとして歌へ無かつたものを、彼等の希望通りに歌つてやつたので、それで彼等は愉悅しきつたのである。民謠詩人の必要はここで生ずる。

私の民謠にはかうした民衆の代辯者として、可なり廣汎な範圍に亘つて歌つたのと、此の自分自身の生活感情を民謠體を以て表現したのと、この二種が混淆してゐる。何れが第一義的かと云へば無論自分自身の民謠である事は否め無い。理想よりすれば、各地に於ける各種類の民衆それ自身が、一々に自己の感情を民謠として表現し、それらの一大綜合が眞の日本の民謠となる事である。が、民衆それ自身に無力であり、更に新らしく進み得ぬ場合に、その代辯者として私のやうに代つて制作する事も致方の無い事である。これは民謠のみでなく童謠制作の場合にも同じ理由で釋明し得られる。

五

私は曾て白秋小唄集一卷を公にした。最近にはこの一月の「中央公論」に民謠百章を發表した。そしてまた次の三百章を四月の「大觀」に寄せた。私の民謠も既に世間に可なり流布してはゐるが、無論私の仕事としてはまだ緒に就いたばかりであるから、更に新に開拓す可き餘地は充分にある。それどころか、寧ろこれからだと云つていい。此等には私の曾て生活し見聞した各地の風土人情等が主になつてゐるが、遠く旅する事の極めて少い私には、まだまだこれから各地方の風色を渉獵する必要が隨分ある。私はその機會をなる可く多く逃すまいと思ふ。それともう一つは、現代に於ける各職業に亘つての歌謠である。たとへば鑛夫、大工、石屋、鐵道工夫、紡績女工、鐵工、造船職工、その他各種の勞働歌等である。かうして徐々として複雜な近代色を加味して行き度いと

願つてゐる。これまでの私の民謠はそれまでの基礎を固めるための再三の地ならしであると思つてほしい。殊に主として二十六字の俚謠調を用ゐたのは、兎に角日本在來の民謠を一先づ私の手に依て統一して置く必要があつたからである。形式に於ても無論これから種々雜多に變化させ進歩させる筈である。

六

なほ、民謠は本來享樂的のものである。民衆は諸種の民謠に依て、その物質並びに精神の勞苦を些少でも慰安しようとする。のみならず、無力なるが故に、辛棘なる社會批判乃至は人生否定の絕叫を此の享樂的な民謠の野調を籍りて遣る。かくして日夕の鬱結の幾許かをこれに依て晴らす。であるから、民謠が表面上享樂的であるからと云つて、全然の享樂と見る可きで無い。私の作るところの民謠にしてからが、單にその表面だけを見て云爲してほしくない。要はそ

の內面の深さにある。

一例を擧ぐれば、小笠原の人情風物を歌つた『ババヤの花』の各章の如き、思を潛めて、その絕海の孤嶋に於ける人心の險惡、人生厭離の情、人間本來の寂寥性等を味つて貰はなければならぬ。『風虹』の中の「鰤網」の如き、濶達陽氣な漁夫の哄笑の裏には橫暴な資本家に對する火のやうな反抗心が匿されてゐる事も見逃がしてほしくない。都會生活の一部を取扱つた『紫まつげ』の中にも「乞食學校」「ニヒリスト」の如きがある。

笑と涙とは單に表と裏との相違である。

本來、人生は無限の煉獄である。光明ある自然の實相と云ふと雖も畢竟は永遠の閑寂そのものである。この境涯にあつて生々滅々する人間そのものの遣瀨

無さを思ふと堪へられぬ。笑と涙とはかうして千々に織り交ぜられて　おのづからにして民衆の歌謠が成るのである。

或る人はまた、私のかうした歌謠を見て、あまりに享樂に過ぎると云ひ、又は茶化し過ぎると云ふ。これに就いて少々云はしてほしく思ふ。

私の作風は可なり明るい。笑が多い。然し表に笑うて見せて、心に泣くその寂しさ遣瀬無さを眞に知る人は少い。

北國人の深刻味は苦しみそのもの涙そのものである。主として思想的概念的であるからして、誰にも理解され易い。然し南國人の深刻味は多くは北方人には理解され難い。單に遊びとし、輕跳なる道化として目に映る。私は元來が南國人である。南國は明るい。然しその無限の光輝の底に譬へしも無い寂しさが、どれほど深い根ざしを据ゑてゐるかに思を致さなくてはならない。南國人は敏

感で、性情も複雜である。一途でも單なる一本氣で無い。笑も單なる笑でなく道化も決して單なる道化で無い。それらは苦しみあまつての笑であり、道化である。それかと云つて、江戸つ兒の如く輕く洒落で流す事も爲得ない。野暮では無いが、微笑してももつと深く微笑する。此の悲しみは眞に南國人で無くては知り得無い鄕土そのものの悲しみである。

私はつくづく思ふ。私の詩歌の眞價を眞に知り得るものは南方、殊に九州人の外は無いと。

どうしても、北と南との間には、理解の上にも隙がある。北方の深刻は南方の感傷的拮屈であり、南方の眞劍は北方から見れば單なる道化の遊びとして映る。これは是非も無き事であらう。

然し、人間が糊付の素木人形で無いならば、終始肩肱怒らして、我からの拮

拮を我と形づくるのが、眞の人間の姿でもあるまい。時には寛いで悠々と自然の儘に自己を放す事も必要であらう。徒に眞劍を叫び人道愛を高唱するのが、眞のそれらでも無い事は、あながち道學先生の例ばかりとも云へ無い。『さう野暮は云ひなさんな。』と微笑したくもなる。

私の民謠には何と云つても、此の南國風のものが多い事も附け加へて云つて置き度い。

七

所謂高貴なる詩歌を始終の念としてゐる詩人達は、民謠とさへ云へば直に低劣卑俗と見る。故に民謠詩人は第三流第四流以下の市井の大俗とされる。

私は民謠作家としても立つた。之が爲めにまた、大俗の詩人と呼ばれるならば呼ばれていいのである。私は甘じて大俗詩人と成らう。

私は、私のものの中で、その最高なものは、別にそれ相當の形式で歌つてゐるのであるから、民謠は民謠でいいのである。

佛者も人を見て法を說けと云つた。詩歌に於てもその表現の種々相は時に從て變幻自在である可きである。

大正十一年三月

小田原天神山にて

白秋識

日本の笛目次

南風の港

鮪　組（十四章）……三
烏賊つり舟（八章）……二二
かかり舟（二章）……二七
今宵今晩（二章）……三〇
夜積みの掛聲……三三
搗布とたんぽぽ（二章）……三五
搗布焼く火（三章）……三九

旅の大船（二章）……四二
沖の大船（二章）……四四
親船小船（二章）……四六
浪の音（四章）……四八
鯨と海豚（二章）……五一
嶋の燈明（二章）……五三
城ケ嶋（四章）……五五
磯の燕（二章）……五八
海女（二章）……六〇
月夜の海女（四章）……六二
かはい男と（二章）……六五
海の雀は（二章）……六七

夏が來たかと（六章）……六九
白南風黑南風……七五
あの子とろり子（七章）……七九
おまへ網舟（八章）……八二
帆かけ（五章）……八八
沿海雜曲（四章）……九二
紅提燈……九五
この子あの子……一〇三

椿日和

女護が嶋（四章）……一〇四
伊達のお腰（二章）……一一〇

紅い椿……一二三
落つばき（四章）……一二四
戀の流人か（三章）……一二七
ぬしは牛飼（二章）……一二〇
お國衆なら（二章）……一二三
出舟（四章）……一二四
沖の小嶋の（二章）……一二七
大嶋（四章）……一二九

パパヤの花

小笠原群島（七章）……一三五
南の海（三章）……一四〇

びいでびいで（二章）……一四一
佛草花（四章）……一四四
嶋はよいとこ（四章）……一四七
驟雨……一五〇
夏の宵月（七章）……一五一
星の夜（四章）……一五六
夕凪（二章）……一五九
南海の戀（五章）……一六一
嶋のあひびき（二章）……一六五
關守（二章）……一六七
追分……一六九
山で（二章）……一七〇

嶋で（その一）（四章）……一七二
嶋で（その二）（五章）……一七五
日の入り（四章）……一七九
月に一度（五章）……一八二
今俊寛……一八六
時化前……一八七
待てば海路の……一八九
阿呆の（二章）……一九一
すぐにつかまろ……一九三
椰子の薄黄の……一九四
離れ小嶋か……一九五
何の煙ぞ……一九七

何を見てゐる（二章）……一九九
嶋の鶯（四章）……二〇一
嶋の日永に（六章）……二〇五
くる〳〵から〳〵（二章）……二一〇
嶋の日永が（三章）……二一二
郷愁……二一六
嶋のたより……二一七

風虹

後朝（三曲）……二二三
沖は晴れかよ
沖は雪かよ
沖は遙かよ

片浦千鳥（二章）……一二二
遠い岬（三章）……一二〇
祭もどり……一二一
鰤網（五章）……一二二
遠漁火……一二〇
風虹……一二一
たまの機嫌と……一二四

紫まつげ

紫まつげ（四章）……一二四
羽根帽子（四章）……一二〇
雪は紫……一二二

月は桃色……一二五
あれは濠端……一二五
オペラ戻り（五章）……一二五
尺八のながし……一二六
バアの主人……一二六
橋の下のお菰……一二四
ニヒリスト……一二五
乞食學校……一二六
わつしよわつしよで……一二六

蟹味噌

博多古調（四章）……一二七

玄海雜曲（八章）……二八三
筑後柳河（六章）……二九五
矢部のやん七（七章）……三〇四
五嶋の權十（六章）……三〇九
柳河河童で……三一四
蟹味噌（三章）……三一六
三潴と沖の端（二章）……三一九

雪の焔

春はあけぼの（二章）……三二五
不二の高嶺に（二章）……三二七
紅吹雪（四章）……三二九

初花ざくら（二章）……三三二
不二の裾野（三章）……三三四
山北……三三六
山じや……三三七
沼津（二章）……三三八
武藏野の不二（二章）……三四〇

草木瓜

こころあたりか（二章）……三四五
あひびき……三四七
風の鳥……三四九
風の筒鳥……三五一

落葉栗かよ……二五二
いとし野山の（二章）……二五四
北山時雨（二章）……二五七
鐘が鳴ります……二六〇
野焼のころ（三章）……二六二
草木瓜……二六四
無宿者の歌……二六五

別れ霜

落葉松（五章）……二六九
旅人の唄（六章）……二七三
伊那（三章）……二七八

御嶽（四章）……二八一
諏訪（四章）……二八四
飛彈の高山……二八七
寒雀……二八八
別れ霜……二八九
山と山との……二九〇
山は雪かよ（二章）……二九一
夜寒（三章）……二九三
冬の夜（二曲）……二九六
曠原
山溪
ちび鶫（二章）……二九九

饑る山鳥……一〇二
嘘つき鳥（二章）……一〇三
どきまぎ……一〇六
馬賣り……一〇九
渡り鳥……一〇九

桑の葉

アリヤリヤンの歌……一一二
繰絲の歌（五章）……一一六
烏かげ（七章）……一一〇

燒の風物

鮪組

1

南風だ、船出だ、
鮪漁だ、組だ。
えいそら、〳〵。
ただこの意氣だぞ、

裸でやつつけ。

今に鮪の
富士の山。

えいそら、〳〵。

2

一度家を出りや、
女房、子もあろか。

えいそら、〳〵。

ただこの意氣だぞ、
早櫓ですつ飛べ。

意氣は三崎の
鮪組。

えいそら、〳〵。

3

時化けよ、しけの風、
どんと吹いてござれ。
えいそら、〳〵。

ただこの意氣だぞ、
三崎の若衆だ。

腕に筋金、
赤ふどし。
えいそら、〳〵。

4

鯱のお荒れだ、
女沙魚よ、時化だ。
えいそら、〳〵。

ただこの意氣だぞ、
なに糞、乗り上げ。

8

雑魚も鰯も
そりや逃げた。
えいそら、〳〵。

5

時化を相手に
荒灘かせぎ。
えいそら、〳〵。

ただこの意氣だぞ、
運を天に任した。
肌の守りは
象頭山。
えいそら、〳〵。

6

どうで惚れるなら

9

鮪の雌よ。

えいそら、〳〵。

ただこの意氣だぞ、
男の意氣地だ。

豆の女雜魚に
用は無い。

えいそら、〳〵。

7

潮だ、早瀨だ、
そりやこそ、鮪。

えいそら、〳〵。

ただこの意氣だぞ、
占めたぞ、追つかけ。

海は鰯の

雪なだれ。

えいそら、〳〵。

8

風は南風のかぜ、
八挺櫓の櫓風。

えいそら、〳〵。

ただこの意氣だぞ、

一氣にやつつけ。

灘は相模灘、
初鮪。

えいそら、〳〵。

9

濱の五十集で、
見せたいものは。

えいそら、〳〵。
ただこの意氣だぞ、
もう一息だぞ。

鮪の胴切り、
沙魚の尻。
えいそら、〳〵。

漕いで漕いで漕いで、
北條の入江。
えいそら、〳〵。
ただこの意氣だぞ、
見えたぞ、燈だ。
晩にや、大漁の
お酒宴。
えいそら、〳〵。

11

揃ろた、揃ろたよ、
大鮪がそろた。
えいそら、〳〵。
ただこの意氣だぞ、
素つ裸で引揚げた。
かつげ、勇みの

伊達仲仕。
えいそら、〳〵。

12

俺が萬祝衣
朝日に波よ。
えいそら、〳〵。
ただこの意氣だぞ、

男の伊達だぞ。

潮に鮪の
飛ぶところ。
えいそら、〳〵。

13

三崎城ケ嶋は
鵜のすむ嶋よ。

えいそら、〳〵。
ただこの意氣だぞ、
大漁だ、〳〵。

14

鵜のみ、酒のみ、
だだら飲み。
えいそら、〳〵。

女ろよ、惚れるなら、
鮪組に惚れろ。
えいそら、〳〵。

ただこの意氣だぞ、
脊負つて立つた、〳〵。

命知らずの
情知り。
えいそら、〳〵。

烏賊つり舟

1

一寸と時化たが、
烏賊つり小舟、
小燒、夕燒、
早や出やる。

2

すぐに點けたか、
ちらちら漁火、
烏賊の墨いろ、
沖や暮れた。

3

夜も夜中も

あの沖漁火、
なにを釣るやら、
ちらちらと。

4

おやぢさまなら
また烏賊つりに、
夜も夜中も
沖がかり。

5

夜釣やいやなもの、
鬼火に小雨、
不在にや間夫引き、
お花札引き。

6

沖にや幽霊、

陸には間夫よ、
干杓貸しやれよ、
嘘貸しやれ。

7

しんとふけたで
夜は凄ござる。
烏賊が鳴きます、
舟底で。

8

どうせ、時化だよ、
鳥賊つり舟よ。
小焼、朝焼、
すぐ歸る。

かかり船

尺八調

1

三崎よいとこ、
女子の港、
宵は入船、
もやひ船。

もやひ船なら
一夜はごんせ、
明日が雨なら、
またごんせ。

2

三崎よいとこ、
女子の港、
せめて、一夜、

かかり船。

かかり船なら
濡れよとままよ、
どうせ、夜明けりや、
また、出船。

今宵今晩

尺八調

1

今宵、今晩、
また船がかり、
祝ひましよぞえ、
お十五夜。

お十五夜なら、
芒にお芋、
たのみますぞえ、
となり船。

2

となり船かよ、
ごきげんさんか、
丸にいの字の

窓燈。

今宵、今晩、
梶差し寄せて、
一晩寝たらば
西ひがし。

夜積みの掛聲

えんやらさアの、どつこいさ、
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。
女子の三崎じや、後生樂じや、
魚の三崎じや、どつこいさ。
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。

まんざらいなでもくるまえび、
こちらも甘鯛、どつこいさ。
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。

さはらばむろ鰺、きす、こはだ、
いよいよしめ鯖、どつこいさ。
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。

お金をかますが、舌びらめ、

ぼられて、ふられて、どつこいさ。
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。

おごせが怒つた、針出した、
ふくれりや虎河豚、どつこいさ。
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。

ほうぼうで逃げ出し、太刀の魚、
やつとこ、すみ烏賊、どつこいさ。
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。

その後やしら魚、飛びの魚
コリコリ海鼠で、どつこいさ。
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。

えんやらさアの、どつこいさ、
そりや、えんやらさアの、どつこいさ。

搗布とたんぽぽ

いつしかに春のなごりとなりにけり
昆布干場のたんぽぽの花　（桐の花）

1

搗布干そとて、
たんぽぽ踏めば、よう、
春も末かよ、
のよ、様よ。

2

搗布干場の
たんぽぽなれば、よう、
果ては吹かれて、
汐のする。

搗布焼く火

1

搗布焼く火よ、
なぜ、燃えつかぬ。
汐のしぶきで
燃えつかぬ。

2

搗布燒く火と、
誰かさんのたより、
しほがつよいか、
燃えつかぬ。

3

搗布燒く火よ、

夜は夜で燃えて、
晝はしぶきの
汐の中。

旅の大船

1

旅の大船
錨をおろし、
月のほばしら、
うしろ梶。

2

月の大船
笛吹き澄まし、
うしろ梶だで、
寄りや暗い。

沖の大船

1

沖の大船
月の出でござる。
明日の日和が
燒けござる。

2

沖の大船
夜の明けござる。
南風の日和が
燒けござる。

親船小船

1

沖の大船
ありや、親船よ、
見やれ、ゆさりとも
帆は搖れぬ。

2

おいら、小傳馬の
まだ親がかり、
いろのろの字の
櫓も持たぬ。

浪の音

1

山で大鋸挽きや、
日かげの長さ。
浪の音聽きや、
日の永さ。

2

浪の音聽きや、
まだ日は永い。
山は辛夷の
花ざかり。

3

あれは鷗か、

日和の海か。
山は檜の
晝の霧。

4

山に日暮れて
ひもじい時は、
沖の大船
見て下る。

鯱と海豚

1

なんだ、なんだちゆだ、
鱗の娘だ、
灘の鯱の子だ、
父がいつ通つた。

2

なんだ、なんだちゆだ、
遠眼の兄哥だ、
沖の海豚の子だ、
お母いつ寢やつた。

嶋の燈明

1

嶋の燈明臺に
燈のつく頃は、
なぜか、櫓臍が
櫓に添はぬ。

2

沖で赤くて、
潽いで來りや青よ。
なぜに燈明よ、
すぐ變る。

城ケ嶋

1

三崎城ケ嶋は
鵜の寢る嶋よ。
岩に岩藤、
汐しぶき。

2

三崎城ケ嶋で
見せたいものは、
岩の鵜の鳥、
海女が紅。

3

三崎城ケ嶋は

婿とり嶋よ、
鮑や取らいで
子安貝。

4

三崎城ケ嶋の
水垂の岩に
赤い鬼百合
濡れて咲く。

磯の燕

1

磯の燕の
飛ぶ影よりも、
海女が目移り、
目は早い。

2

磯の燕の
頬の紅よりも、
宵は口紅、
海女が紅。

海女

1

伊豆の岬見りや、
もう日は紅い。
籠の鮑は
まだ満たぬ。

2

嶋の鬼百合
早や花盛り、
わたしや、紅さす
ひまも無い。

月夜の海女

1

しぼれ、裳の裾、
日は早や紅い。
海女よ、月夜の
海となる。

2

うしろ、満月、
飛ぶ鳥一羽、
こちら向きやれよ、
海女が紅。

3

籠の鮑を

濡手で提げて、
海女は濡髪、
月の磯。

4

圓い月夜に
また汐ぐもり、
かげりや、遠かろ、
海女が家。

かはい男と

1

かはい男と
磯馴松は
日にち見てれど、
見飽きやせぬ。

2

うはき男と
沖の瀬の岩は
日にち見てれど、
氣がもめる。

海の雀は

1

海の雀は風吹きや翔ける。
わたしや、ふられて波もぐる。
海の雀は連れ連れ翔ける。
わたしや、片戀、鮑取る。

2

海の雀は波間にうかぶ。
わたしや、照る日も波もぐる。

海の雀は連れ連れうかぶ。
わたしや、離れてかぢめ取る。

夏が來たかと

1

夏が來たかと、
海の底見れば、
　　ギツチョンチョン、〳〵。
ところてんぐさ、
花盛り、よ。

オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、
ギツチヨンチヨン、〳〵。

2

あまりつらさに、
眼鏡でのぞきや、
ギツチヨンチヨン、〳〵。
章魚が歩るいて、
章魚の影。
オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、

ギツチヨンチヨン、〳〵。

3

誰かゐるかと、
磯へ出て見れば、
ギツチヨンチヨン、〳〵。
空らの蛸壺、
百合の花。
オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、
ギツチヨンチヨン、〳〵。

4

あまり暑いで、
海へ出て泳ぎや、
ギツチヨンチヨン、〳〵。
何か、足引く、
出臍突く。
オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、
ギツチヨンチヨン、〳〵。

5

誰か來るかと、
濱へ出て寢れば、
ギツチヨンチヨン、〳〵、
赤い宿かり、
蝦の足。
オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、
ギツチヨンチヨン、〳〵。

6

首をくくろと、
磯山ゆけば、
　ギッチョンチョン、〳〵。
岩に舟蟲、
さがり藤。
　オヤマカ、ドツコイ〳〵、ヨウイトナ、
　ギッチョンチョン、〳〵。

白南風黒南風

油壺のうた

小焼、夕焼、
風ぐるま。
　明日は日和か、風ぐるま。
　せめてたよりを待ちましよか。
　風が吹きます、白南風が。

小焼、朝焼、
風ぐるま。
明日はあらしか、風ぐるま。
どうで、たよりも片だより。
風が吹きます、黒南風が。

あの子とろり子

1

あの子、とろり子
油壺うまれ、
しんととろりと
見て惚れる。

2

あの子、とろり子
油屋のむすこ、
油壺から
出たむすこ。

3

あの子、とろり子

油壺そだち、
油のりたて、
まだ、とろり。

4

あの子、とろり子
とろとろ燈。
ぼやり雪洞、
晝行燈。

5

あの子、とろり子
惚れごろ、見ごろ、
油菜たねの
花ざかり。

6

あの子、とろり子

とろとろ、寝ごろ、
いつか、誰かさんと
寝て、とろり。

7

あの子、とろり子
おぼろの月か、
いつか、とろりと
出て曇る。

おまへ網舟

1

おまへ、網船、
小雨に苦よ、
日和、てんぐさ、
かぢめ舟。

2

おまへ、餌舟、
餌賣るばかり、
いつも日和見、
降りや逃げる。

3

おまへ、遊びか、

ひやかし舟か、
酒に浮かれて
漕ぐばかり。

4

おまへ、千石
わしや圓平よ、
どうせ、下積み
煉瓦舟。

5

おまへ、炭舟、
ちやんころ舟よ。
赤いお襁褓を
また干しやる。

6

おまへ、渡海舟か、

帆に帆を下げて、
知らぬふりかよ、
目の前を。

7

おまへ、帆かけか
また出戻りか、
風の變りに
西ひがし。

8

おまへ、三盛丸、
靈岸嶋がよひ、
いつも夜出て
晝歸る。

帆かげ

1

ふられやせなんだか、
下田の夜船、
明けて濡れたか、
帆が重い。

2

帆の段々帆は
いつ出てわせた。
何處の霧れから
出てわせた。

3

霧れて逢はうぞと

別れたものを、
すぐに時化船、
最寄り船。

4

雨にむしろ帆、
日和に白帆、
朝日夕日に
緋の片帆。

5

月の夜ふけの
幽霊船は
空に帆ばかり、
風ばかり。

沿海雑曲

1

北條がよひか、
遊ケ崎か、
見ても通り矢、
安房ケ崎。

2

雨は諸磯、
二町谷は月夜、
燈、チラチラ、
油壺。

3

茶屋は引橋

藤の花盛り、
娘ざかりは
來て三崎。

4

たとへ松輪でも
長井はよしな、
浮名衣笠、
見て通り矢。

紅提燈

盂蘭盆の宵、三崎と向ヶ崎の子供たちは、北條入江を隔てて、互に紅い提燈を振り振り歌ひ囃す。互に歌で罵り合つて夜のふけるのも知らない。その紅提燈の唄として作つた。

歌ひ囃そよ、
紅提燈の唄を、ヨ。
濱の盂蘭盆はけふ明日かぎりよ。
むかうの提燈まだ遲い。

こつちの提燈はや紅い。

歌ひ囃そよ、
紅提燈が揃ろた、ヨ。
揃ろた、揃ろたよ、紅提燈が揃ろたよ。
むかうの提燈まだ點かぬ。
こつちの提燈はや點けた。

歌ひ囃そよ、
向ケ崎の章魚は、ヨ。

足が七つで、九月で生れた。
むかうの提燈そりや逃げた。
こつちの提燈またふえた。

歌ひ囃そよ、
三崎の貝は、ヨ。
赤いべろべろ、舌出して乳なめた。
むかうの提燈そりや消えた。
こつちの提燈また點けた。

歌ひ囃そよ、
汝つちのお母は、ヨ。
見ても痩きす、揚潮河豚だんべ。
むかうの提燈ふつ消せやい。
こつちの提燈振り立てやい。

歌ひ囃そよ、
汝つちの父は、ヨ。
いつも法螺貝、赤耻かきだんべ。
むかうの提燈また落ちた。

こつちの提燈また殖えた。

歌ひ囃そよ、
汝つちの姉やは、ヨ。
鶯尻ふり、ろくろ首の女龜だよ。
むかうの提燈それ化けた。
こつちの提燈それ攻めた。

歌ひ囃そよ、
汝つちの兄やは、ヨ。

蟹の横這ひ、なまくら海鼠よ。
　むかうの提燈それ這つた。
　こつちの提燈それ追つた。

歌ひ囃そよ、
汝つちの背戸は、ヨ。
雑魚の御施餓鬼、蒼蠅のお經よ。
　むかうの提燈葬式だ。
　こつちの提燈お祭だ。

歌ひ囃そよ、
汝つちの家は、ヨ。
磯の宿かり、日乾しの蠑螈だ。
　むかうの提燈かりものだ。
　こつちの提燈わがものだ。

歌ひ囃そよ、
紅提燈の唄を、ヨ。
濱の盂蘭盆、けふ明日かぎりよ。
　むかうの提燈もう暗らい。

こつちの提燈まだ更けぬ。
歌ひ囃そよ、
紅提燈がふけた。
ふけた、ふけたよ、紅提燈がふけた。
むかうの提燈はや消える。
こつちの提燈まだ紅い。

この子あの子

あの子もたうとう死んだそな。
嫁取り前じやに、なんだんべ。
蕪畑にや鰯がはねる。
お墓まゐりでもしてやろか。
この子もたうとうおつ死んだ。

嫁入り前だに、なんだんべ。
花は馬鈴薯、うす紫よ、
鉦でも叩いて行きましよか。

どの子もどの子も、なんだんべ。
色事ひとつ知んねえでな。
子芋もどつさり殖えたによ、
かはいさうだよ、まつたく、なあよ。

秋日抄

女護が嶋

1

女護が嶋じやよ、
殿ならおじやれ。
男後生樂、
手はとらぬ。

2

南風じやぞ、
みな出ておじやれ、
迎へ草履の
紅鼻緒。

3

穿かば穿かんせ、

ただ殿まかせ、
紅い鼻緒の
投げ草履。

4

沖の青ケ嶋、
殿御の嶋よ。
南風そよそよ、
女護が嶋。

伊達のお腰

1

伊達のお腰の
練玉の紐は、
誰も觸れねど
しやら〳〵と。

2

觸れちやくれまい、
練玉の紐に、
嶋の娘は
一重帶。

紅い椿

紅い椿を、
一寸、目で知らせ、
知らぬ顔して、
さて、しやらり。

紅い椿の

花かげ出れば
知らぬ顔して、
また、しやらり。

落つばき

1

紅いつばきよ、
髪梳きましょか、
ここは谷かげ、
かくれ井戸。

2

わしが髪梳きや
ぽんと首たたき、
紅い椿よ、
誰が逃げた。

3

ほたと落ちたは

紅玉つばき、
誰もおじやらぬ、
嶋つばき。

4

誰も見もせぬ、
また來もせぬが、
紅いつばきが、
また落ちた。

戀の流人か

1

戀の流人か、
椿の井戸に、
光らしやんすぞ。
嶋雉子。

2

戀の流人か、
釣棹かたげ、
光らしやんすぞ。
磯燕。

3

戀の流人か、

茅屋の月に
光らしやんすぞ、
ほととぎす。

ぬしは牛飼

1

ぬしは牛飼、
笛吹き上手、
いつも横眼に
見て通る。

2

見やれ、水甕、
黄八丈の羽織、
わたしや、頭も
濡らしやせぬ。

お國衆なら

1

お國衆なら
持て來てたもれ、
戀のむだ花
わすれぐさ。

2

いかな、忘りよか、
お國の人は
泣きの涙を
置土產。

出舟

1

いよ別れか、
ばらばら松か、
ここは樫立、
早や泣ける。

2

八丈八重根の
瀬の瀬の岩よ、
汐の走りを
なぜ堰かぬ。

3

船の纜

ふつりと切れりや、
縁が切れたと、
逃げる氣か。

4

八丈八重根の
後追ひ千鳥。
舟も出たじやに
なぜ死なぬ。

沖の小嶋の

1

沖の小嶋の
ちらちら雪は、
すぐにこぬかの
雨となる。

2

深くなりやこそ、
八丈の雪は、
すぐに別れの
雨となる。

大嶋

1

髪は背の丈、
油は椿、ヨ、
いとしアンコは、サア、
嶋そだち。ヨ。

2

月の椿の、
花かげゆけば、ヨ、
油搾木の、サア、
音ばかり。ヨ。

3

アンコ御不在か、

また夜あるきか、ヨ、
月の寢宿か、サア、
花かげか。ヨ。

4

アンコ小憎くや、
そうめん絞り、ヨ、
誰に解かした、サア、
洗ひ髪。ヨ。

花のヤパパ

小笠原群島

1

お父、父嶋、
お母、母嶋よ。
離ればなれの
秋の雲。

2

わたしや、父嶋、
父親がかり。
いとし母嶋、
去られ嶋。

3

父の嶋から

背伸して見れば
うみの母嶋、
乳房山。

4

父の嶋より
兄嶋恐や、
風の出潮は
なほ恐や。

5

弟嶋かよ、
皆朱の崖に、
椰子がちよぼちよぼ、
棄兒嶋。

6

婿と嫁嶋、

また時化ぐもり、
間の媒介嶋、
仙氣嶋。

7

妹嶋かよ、
繼子の姉か、
なまじ朝燒、
すぐ時化る。

南の海

1

淺瀨、水あさぎ、
入江は瑠璃よ、
沖は黑潮、濃むらさき。

2

崖は紅いろ、
バナナは綠、
檳榔しやら〳〵、晝の月。

3

いつも鶯、
紅い花ばかり、
嶋の墓場の婿曳。

びいでびいで

びいでびいでの木の花は紅い、花かんざし
のやうな南國の花

1

びいでびいでの
今、花盛り、
紅いかんざし、
曉の霧。

2

びいでびいでの
あの花かげで、
何とお仰つた、
末かけた。

佛草化

1

おまへ、佛草花の
紅い花盛り、
氣儘さしやんせ、
今盛り。

2

紅い佛草花の
まだ、あの背戸に、
なにか忘れた、
氣がしてる。

3

紅い佛草花の

咲く窓越えて、
來いと誰が云うた。
月に云うた。

4

月に見つけた、
佛草花の垣に、
誰か忘れた
獨木舟の櫂。

嶋はよいとこ

1

柱、白檀、
檳榔葉のお屋根、
嶋はよいとこ、
寢て暮らす。

2

朝日夕日に
白檀焚いて
嶋はよいとこ、
赤茄子飯。

3

風呂を沸かすなら

白檀焚いて、
嶋はよいとこ、
椰子の月。

4

「様の寝煙草」に和して

たとへ白檀
千両しょとままよ、
様の化粧湯は
絶やしやせぬ。

驟雨

さアと來たせか、
からりと霽れて、
嶋は男の宵の月。

夏の宵月

1

月の圓さよ、
今宵の明さ、
護謨の葉越しの
燈の青さ。

2

嶋は宵月、
宵からおじやれ、
かはい獨木舟で
早よおじやれ。

3

今は宵月、

夜ふけておじやれ、
濱はタマナの
花ざかり。

4

忍び忍ばれ
夜ふけて來たが、
今ぢや宵月、
晝の虹。

5

花で白いのは
タナマに萬年青。
月に阿呆鳥。
天の川。

6

様か、ひとりか、

埠頭の月に
ぽつり、煙草の
火がついた。

7

月の蕃瓜樹に
笛吹き上手。
窓は四角の
青硝子。

星の夜

1

宵の明星の
線ひく海は
月の夜よりか
まだ白い。

2

椰子の葉末の
ぬか星なれば、
まだもチラチラ、
眼も合はぬ。

3

天の川かよ、

一本椰子か。
浪の音かよ、
夜のふかさ。

4

せめて、夜の明け、
満潮待ちやれ。
星のチラチラ
見て漕ぎやれ。

夕凪

1

明日は日和か、
月待ち雲か。
小焼夕焼
帆がつづく。

2

今宵月夜か、
夕陽の岬か、
かはい獨木舟の
緋の片帆。

南海の戀

1

赤い雲丹かよ、
岩間の薔薇か、
とても見事な
ぬしの刺。

2

紫天鵞絨の
海鼠じやなかろ、
なぜに骨なし、
寝てばかり。

3

磯で憎いは、

色變章魚よ。
知らぬ顔すりや、
酢をかけろ。

4

長居、長蝦、
章魚足、海膽、
海鼠コリコリ、
酢を嚙まそ。

5

海で赤いのは
珊瑚の森よ。
磯で海松、
椰子の月。

嶋のあひびき

1

信天翁の
羽根つむ小舍は
白い月夜の
忍び場所。

2

赤い畑の
バナナの蔭は
晝のやすみの
かくれ場所。

關守

1

ババヤ咲いたかやと、
そつと寄つてゐたら、
山羊が見つけた。
角立てた。

2

明けの山椒の實を
そつと出て嚙めば、
瑠璃鳥が見つけた。
聲立てた。

追分

誰が吹くのか、月夜の嶋に、
ひとり、ほそぼそ、一節切。

椰子の花咲く南の夏に、
忍路高嶋、北の雪。

山で

1

山でかをるのは
メリケン女松、
紫檀、黒檀、
たがやさん。

2

ヘゴは千年木
花こそ咲かね、
獨活の大木
ほろと朽つ。

嶋で　その一

1

嶋で畑うちや、
遙かなものよ。
海のはたてに
日が落ちる。

2

嶋で甘蔗刈りや、
果敢ないものよ。
雲の影ばか
見て暮れる。

3

嶋で木を挽きや

かすかなものよ。
磯の香もする。
聲もする。

4

嶋で牛が啼きや、
ひもじいものよ。
浪の響で
日がはひる。

嶋で　その二

1

嶋で忍べば
氣がねなものよ。
蟹のシャボテン、
横くぐり。

2

嶋で餓ゑりや、
つれないものよ。
腐れバナナの
油蟲。

3

嶋でにくいは

隣の白眼。
月夜蝙蝠
蝦のひげ。

4

嶋で砂糖磨きや
せつないものよ。
黑い汁ばか
出て凝る。

5

嶋で血を吐きや
もうおさらばよ、
どうせ、深海、
鱶の餌。

日の入り

1

海の遙かに
日の入るころは、
こころぼそさよ、
身の小さ。

2

遠く離れて
泣きたい時は、
せめて、磯端、
舟見山。

3

かぎり知れねど、

また山のぼり、
せめて、日の入り
海のはて。

4

西は日の入り、
東は月夜、
なまじ、遠凪、
雲の紅。

月に一度

1

明日か明日かと、
舟見の山に、
煙ひとすぢ
待ち暮らす。

2

月に一度の
汽船の汽笛きけば、
命惜しさよ、
國戀し。

3

日和、入船、

紅鐵漿つけて、
時化の出船にや、
つくね髪。

4

汽船の出るまで、
降らずにゐたが、
汽笛が鳴つたで、
早や時化た。

5

汽船も出るかよ、
もう出て去たか、
消ゆる煙か、
また泣けかゝ

今俊寛

信天翁の啼くころきけば、
とても、日暮がたよたよと。

どうで、歸れにや、
檳榔葉の小舍で、
白髮拔きましよ、
燈もとぼそ。

時化前

時雨山かよ、
三日月山か、
時化か、暴風雨か、
風波か。

どちら向いても

迅潮ばかり、
とても、ちよつぽり、
舟見山。

待てば海路の

待てば海路の
日和はあろが、
どうで空ろ舟、
櫂や一つ。
搔いて廻れど、

このをどけ櫂、
波をかぽかぽ、
杓子櫂。

阿呆の

1

阿呆の阿呆鳥、
逃げたてむだよ。
つひに嶋鳥、
もがき鳥。

2

肢足ひんもがれた
正覺坊が泣きやる。
命や惜しかろ、
ほろほろと。

すぐにつかまろ

すぐにつかまろ、
荒海、小嶋、
何處へ逃げらりよ、
かくれらりよ。

椰子の薄黄の

椰子の薄黄の
花さくころは、
なぜか、こころがそよ〳〵と。

椰子の梢に
實のなるころは、
なぜか、こころがから〳〵と。

離れ小嶋か

離れ小嶋か、
一本椰子か、
紅い月夜か、
夜のふけか。

寢てもさめても

さらさら、葉ずれ、
思ひかねてか、
海見てか。

雪のお國の
ちらちら燈、
さては、彼方の
夢見てか。

何の煙ぞ

何の煙ぞ、
珈琲山越えて、
風にひとすぢ
濃むらさき。

どうで離れ嶋、

煙は煙、
空の遙かが
ただ青い。

何を見てゐる

1

何を見てゐる。
青い眼の娘、
岩にもたれて
はるばると。
ソリヤ、はるばると。

海を見てゐる、
いつもいつも、娘、
風のたよりも
まだ無いか。
ソリヤ、無いか。

2

何を見てゐる。
あの嶋娘、

獨木舟に腰かけ、
うつうつと。
ソリヤ、うつうつと。
海を見てゐる、
いつもいつも、娘、
遠い東京は
まだ知らぬ。
ソリヤ、知らぬ。

嶋の鶯

この嶋には雀がゐないで、鶯ばかりが、内地の雀のやうに朝から晩まで年が年中啼きつづけてゐる。

1

癈れ監獄署に、
佛草花が紅い、ネ、
鳴けよ、鶯、
日は永い。

2

嶋の鶯、
年が年中啼こと、ネ、
海はわたれず、
谷わたり。

3

嶋の黒檀、

かをりもよいが、ネ、
夜は鶯、
寢もやらぬ。

4

しばし、鶯、
あつち向いて啼きやれ、ネ、
せめて、うたたね、
赤茄子めし。

嶋の日永に

1

嶋の日永に
磯へ出て釣れば、
汐の早瀨の、
　汐の黑瀨の
渦ばかり。

2

嶋の日永に
山へ往て寢れば、
風に檳榔葉の
　空に檳榔葉の
音ばかり。

3

嶋の日永に

岩戸から透かしや、
雲の飛ぶよな、
　空の飛ぶよな
影ばかり。

4

嶋の日永に
出て珊瑚拾ひや、
流れ藻草の

船の壊れの
破片ばかり。

5

嶋の日永に
教會堂を覗きや、
山羊の啼くよな、
消えて啼くよな
聲ばかり。

6

嶋の日永に
一寸と、肱曲げりや、
國へ歸つた、
里へ歸つた
夢ばかり。

くるくるからくる

1

風にくるくる、
測候所の風見、
嶋の日永の日は小さい。
くるくる。

2

風にからくる、
椰子の實の殼よ、
嶋の日永の日は高い。
からくる。

嶋の日永が

1

ねんね、ほろろん、
ねんねと遊びや、
嶋の日永が
わしや泣ける。

ねんね、ほろろん、
ねんねのお鳩、
嶋の日永が
わしや泣ける。

2

ゆたりゆたりと、
正覺坊と轉びや、
嶋の日永が

わしや泣ける。

ゆたりゆたりと
岸うつ波よ、
嶋の日永が
わしや泣ける。

3

のろりひよろりと、

阿呆鳥を追へば、
嶋の日永が
わしや泣ける。

のろりひよろりと、
逃げ出す鳥よ、
嶋の日永が
わしや泣ける。

郷愁

月の夜ぶかに
空飛ぶものは、
夢の影鳥、
秋の聲。

嶋のたより

マドロスパイプで、龜獲り上手。
いつかあいつも死んだそな。
笛吹き上手の雜種兒の兄哥、
あれも肺病で死んだそな。

酒の赤鼻、西班牙わたり、
いやな爺も死んだそな。

かはいリデヤも、月の夜の海で、
かはい男と死んだそな。

薔薇で自慢の黒んぼの家も
みんな布哇へ逃げたそな。

戀の駈落ち、いつまでゐよか、

みんなちりぢりばらばらさ。

嶋の日永に羽振のきくは、
今は誰やら、ともかくさ。

紅いスカアト、眼鏡のお婆
虱つぶしてまだゐやろ。

旺風

後朝 三曲

沖は晴れかよ

沖は晴かよ、
早や朝凪か、
濱は滿潮、
法螺の呼び。

法螺が鳴つたとて、
どうかへさりよか、
こんど、綱解きや、
よその舟。

沖は雪かよ

沖は雪かよ、
ふぢ紫か、
濱はしら波、

むら千鳥。

明けの千鳥の
數飛ぶよりも、
はぐれ鴉が
わしや憎い。

沖は遙かよ

沖は遙かよ、

また風虹か。
濱は引潮、
やらず雨。

やらず雨さへ
後追ふものを、
末はしら波、
帆かけ舟。

片浦千鳥

1

何處ぞ、祭か、
月夜の囃子、
濱は松風、
浦千鳥。

わたしや、迷子の
片浦千鳥、
啼けど、遠音の
里囃子。

2

何處ぞ、祭か、
ちらちら燈。
濱は松風。

里囃子。

近いやうでも
あの里囃子、
なまじ、月夜の
遠燈。

遠い岬

1

遠い岬に
燈のつくころは、
なぜか、眼先が
ちらちらと。

2

そこの岬か、
幾濱先か、
とても、ちらちら、
宵燈。

3

遠い岬に

燈のつくころか、
濱にちりちり、
宵花火。

祭もどり

祭もどりに
お月さんにはぐれ、
わたしや、お母ちやん
戀の闇。

鰤網

1

明日は大漁か、
夕燒ござる、
伊豆の大嶋
えんやら、茜雲。

えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。
舟なら四挺櫓、八挺櫓、
腕なら男の若盛り、
えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。

2

またも時化かよ、

あの風雲は、
なまじ天城の
えんやら、朝の虹。

えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。
どうでもこいつは命がけ、
板子は一枚、底奈落、
えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。

3

惚れりや、ねこそぎ
西濱がよひ、
失敗りや、鰤網、
えんやら、東沖。

えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。
網主大事か、こちとらか、

どうでも食はれにや同心棒。
えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。

4

鰤か、鰆か、
あの潮先は、
虹の七色、
えんやら、大漁いろ。

えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。
網主一人が神さまか、
こちとら裸か、網雜魚か。
えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。

5

北は大山、

南は嶋よ、
東、房州、
えんやら、西、天城。

えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。
大漁だ、大漁だ、また大漁、
舟主、網主、網の雜魚。
えんやら〳〵、えんやらほ、
えんやら〳〵、えんやらほ。

遠漁火

雨夜、星の夜、
いづれとないが、
月の夜頃の
遠漁火。

宵は、ちらちら、
夜中は、ぽつり。
明けりや、ほんのり、
薄漁火。

どうで、外海、遠漁火、
點いても消えても、
此方や、しょんがいな、
ええ、しょんがいな。

風虹

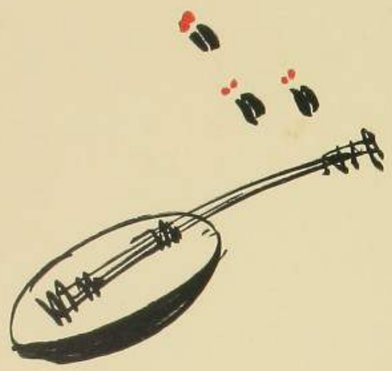
今朝も、
風空、
また時化ぐもり。

虹が、
見えます、

山の尾に。

早やも
漕ぎやるか
また沖釣か。

どうで、
出やるなら、
蓑に苫。



第まげ

たまの機嫌と

たまの機嫌と、
朝立つ虹は、
時化やせぬかと、
氣にかかる。

紫まつげ

1

ひたと瞪(みは)つた
圓(つぶ)ら眼(め)ばかり、
緣(ふち)のまつげの濃紫(こけらさき)。

2

紫まつげと
圓ら眼の瞳、
孔雀玉とは誰が云うた。

3

少しうつむきや、
あの横顔の
長いまつげの濃むらさき。

4

長いまつげの
かはいの露よ、
ほろと落ちそで、まだ落ちぬ。

羽根帽子

オペラのボックスにて

1

おまへ、かはいい
おはねの帽子よ、
うしろ向いたで、なほかはい。

2

おまへ、お連れか、
おとなりさまか、
猶太の鍵鼻、革嚢。

3

おまへ、かはいい
紫ほぐろ、
つんと横向く羽根帽子。

4

口笛吹き吹き、
そしらぬふりよ、
かはい、小憎らし、羽根帽子。

雪は紫

雪は紫、
宵の雪。
窓から、チラチラ、遠燈、
どうで逢はれぬ戀ならば、
せめて遠目にマンドリン。

*

雪は紫、
圓弧燈、
泣いてゐましよか、掛けましよか、
どうせ添はれぬ戀ならば、
いつそこのまま小夜吹雪。

月は桃色

月は桃色、
宵の月、
窓に腰かけ、街の月、
どうで逢はれぬ戀ならば、
せめて爪彈き、マンドリン。

*

月は桃色、
燈はともる。
ちよいと出ましよか、寄りましよか、
どうでかくせぬ戀ならば、
いつそ珈琲の濃紫。

あれは濠端

あれは濠端、
春の月、
水には、チラチラ、遠燈、
逢ひに出ましよか、止しましよか、
小さい電車も駛ります。

オペラ戻り

1

オペラ戻りの小夜ふけて
空には二十日の月の暈、
狐いろした月夜でも
たまにや萌黄の雨もふれ。

2

夜ふけて歸れば彎み屋根、
空には弓月、狐いろ、
鍵も合はねば、戸もあかず、
どうせ、降られた一人もの。

3

椅子は椅子とて壊れ椅子、

卓子は卓子で腰曲り、
紅いボルドオは瓶ばかり、
男やもめにや、雲脂ばかり。

4

蠟燭一片、酒は無し、
せめて灯だけも點けましよか。
「おや、おや、壊れ卓子がありまする、
これでもピアノに見立てましよ。」

さあさ、ショパンの愁夜曲、
青い月夜になりまする。

5

紫睫毛の目ばたきと、
紅い唇、
そればかり、
いえいえ、首すぢ、うしろつき、
名さへ知らねば、しよんがいな。

尺八のながし

どうぞや〳〵、ほうほろり、
あはれなものでしよ、ほうほろり、
どうぞや〳〵、ほうほろり、
右やひだりや、ほうほろり。

バアの主人

七日のお月さまオリブ色。
お鳩もぽうぽう、啼きましよで、
今夜お光來を願ひましよ、
先のお貸しもおついでに。

橋の下のお菰

ここは橋の下、お茶の水、
萌黄のお月さん、雨あがり、
秋刀魚焼かうか、
接吻しよか、
此處はヴエニスか、セエヌ河。

ニヒリスト

ああ、あの金持も殺された、
ずゐぶんお金は溜めてたろ。
ああ、あの政治家も殺された、
權力が頼りでやつてたが。

ああ、あの哲學者も心中した、
戀に命を投げ出した。

ああ、あの夫人も家出した、
歌もさほどぢや無いんだがな。

ああ、あの連中もビクビクだ、
名まへばつかり恐れてる。

とにかく、皆さん、仕合せさ、

なにかに頼れりや仕合せさ。

ああ、ああ、わたしはこれきりだ、
何もかも、もう、おさらばだ。

乞食學校

校長は乞食の親分で、お鐵ぐるみでゾロリとした風、八字髭、金鎖を帶にまきつけてゐる。座つて拍子木をたたく。

教師は親方の女房、小意氣な姉御風。これも上手に座つて三味線を彈く、美くしいが權のある顏。かういふ小學校は事實本所邊にある。この唄は「茄子かぼ」のやうな節。

さあさ、來た〳〵、ひよつこ〳〵、飛んで來た、
跛どんのお稽古だ、びつこ〳〵曳いて來た。
お囃子に合して、お腰を一寸と振つた。

右の肩落つことして、左をぴよつこり振つて、
それこそ可愛想に、片足ひよつこ〳〵。
うまいぞ〳〵、その足〳〵。

さあさ、來た〳〵、のつそのそ、匍つて出た。
足蹇どんのお稽古だ、兩手で匍つて出た。
お囃子に合はした、お尻であるいた、
右の足を投げ出して、左は折り曲げて、
それこそ、みじめに、泣く泣く見上げて、
うまいぞ〳〵、その眼だ〳〵。

さあさ、來た〳〵、こつつ〳〵、やつて來た、
小盲目どんのお稽古だ、眼塞いで出て來た、
お囃子に合した、お杖で探した。
時々眼あけて、慌てて塞いで、
それこそ困つて、途方に暮れましよ。
うまいぞ〳〵、その杖〳〵。

さあさ、來た〳〵、ぶる〳〵、ふるへた。
お袋どんのお稽古だ、赤んぼを寢かした。

お囃子に合した、お乳をはだげた、
赤んぼをあやして、お尻から捻つて、
それこそ、ひいひと、泣かした〳〵、
うまいぞ〳〵、その手だ〳〵。

わつしよわつしよで

わつしよわつしよで、
早や夏祭、
伊達の花笠。
馬鹿囃子。

わつしよわつしよで、

神田の祭、
祭過ぎたら
また、痩せた。

蟹の子

博多古調

1

博多、「お出でましたかね。」
商人。
どんたく日和。
「昔や、唐船、
八幡船。」

兵兒に青竹、
伊達の帶。

「柳町から可愛い小女郎が出て招く、
ハイ、今晩は。」

2

今日は、「お出でましたかね。」
どんたく、

皆さま御免。

「仁輪加で御溜飲
一寸と下げて、」

明日は商人、
縞の帶。

「酒樽ポンとたたいて浮かしやんせ、
サア、どんだくだ。」

3

博多、「乘り出しまつしよかね。」
出てから、
唐津で月夜、

「おも梶、とり梶、
八幡船。」

平戸、嚴原、

星あかり。

「澳門過ぎれば暹羅國。
ハア、よか凪ね。」

4

灘は、「乘り出しまつしよかね。」
玄海、
平戸は瀨戸よ。

「博多小女郎を
一寸と乗せて。」

船は唐船、
浪まくら。

「ジャガタラ、天竺、なんのその、
ハア、よか凪ね。」

玄海雑曲

1

瀬戸は、「乗り出しまつしよかね。」
早鞆、
迅風で通よや、

「ちらちら燈は
下の關。」

汐は一汐、
帆は輕るい。

「お月さんも一寸と出て門司の岬、
ハイ、今晩は。」

2

海の、「お出でましたかね。」
中道、

ふつりと絶えて。

「あちらは玄海、
こちや博多。」

波はたかの嶋、
離れ嶋。

「お月さんが一寸と出て松のよこ、
ハイ、今晩は。」

3

芥屋の、「お出でましたかね。」
大門の
汐漚なれば、

「戻るにや戻れず、
浮ばれず。」

果てはしら波、

闇の泡。

「お月さんがちらと出て、岩の外、
ハイ、今晩も。」

4

沖の、「お出でましたかね。」
小嶋か、
裏向き嶋か。

「紅い襷を
一寸と投げて。」

小焼、夕焼、
すぐ焼ける。

「焼けるなら焼けなはつても、こんがりと、
サア、また來たね。」

5

岸流、「お出でましたかね。」
嶋かよ、
十六むさし。

「賭搏は好きなり、
酒は飲む。」

つまりや、身のはて、

波のはて。

「お前さんの雨刀づかひにやかなやせぬ。
ハア、こりこりだ。」

6

博多、「お出でまつしよかね。」
しぼりか、
小倉の帶か。

「狐は啼き出す、
雨はふる。」

とても、久留米の
紺がすり。

「おこんさんが一寸ぢと出て萱のかげ。
ハイ、今晩は。」

7

誰を、「お出でましたかね。」
呼ぶやら、
呼子の瀬戸で、

「港は何處じやと
平戸船。」

波に千鳥が
ちりちりと。

「お星さんがチラチラと浪のかげ。
また、今晩も。」

8

九十、「お出でましたかね。」
九嶋の

數ほど通よて。

「今宵は百代さ
ただ一目。」

呼べと呼子の
はぐれ鳥。

「お星さんがチラチラと浪の外、
また、明晩も。」

筑後柳河

1

筑後、柳河、
柳に燕、
水にや鳰鳥、
かきつばた。

「鴉鳥の頭に火ん點いた、
潜んだと思つたら、けえ消えた。
よか、よか。」

2

筑後、柳河、
阿蘭陀なまり、
街は朱欒の
花盛り。

「祇園守りは殿の紋、
御紋は十字架の花づくし。
よか、よか。」

3

筑後、柳河、
てれつくてんの囃子、
娘御詠歌に

風流舞。

「菜の花盛りは狐つき、
河童に、菱賣に、櫨紅葉、
よか、よか。」

4

筑後、柳河、
そりばつてんが、くさん、

のうも、めすかんも、
ちいん、よかの。

「ウンテレガンのあん情人ふたごころ、
俺や、そりばつてんが、ひとすぢに。」

註、そりばつてん。「然しながら」。阿蘭陀なまり。
くさん。「ネ」である。「あのくさん」は「あのネ」、「あのくさんも」は少し品がよくなる。
のうも。「あのネ」である。
めすかんも。なさいますか。「おいでめすかんも」は「おいでなさいますか」である。いつも語尾には、んもを使ふ。断定の時にはばんも、疑問の時にはかんも。めす、

めせ、めした。いつも語尾に使ふ。

ちいん。「ちつとも」である。「ちいんがらん」は「ちつとも借りない」と云ふことである。凡て語尾にはんがつく、極めて音樂的で、鳴物の音で話してゐるやうである。

ヴンテレガン。支那語か阿蘭陀語かわからない、長崎風である。愚圖六でも無し、ならず者でもなし、ぐでんぐでんの醉つたんぼでも無し。その中間であらう。いやな奴。輕蔑的に憎しんで云ふ時使ふ。

5

筑後、沖の端、

水天宮の祭、
潟にや不知火、
六騎舟。

「トンカ・ジョンにチンカ・ジョンに、よかオンゴ、
アゲマキ、ムツゴロ、青メクワジヤ、
よか、よか。」

註、六騎その他。この町の漁師はもと平家の落武者六騎の子孫である。それで、漁師を六騎(ロッキェ)と云ふ。この潟は有名な筑紫潟である。貝類は日本で一番珍ら

しいものがある。アゲマキもさうである。メクワジヤもさうである。ムツゴロは鰐に似た潟に棲む魚で、前世紀の殘物ださうである。トンカ・ジョンは、きい坊つちやん。チンカ・ジョンは小さな坊つちやん。ガンゴはお孃さん。

6

高麗鴉（コウゲガラス）に、蜘蛛絲（コブナエ）、蝦蟇（ワクド）、虹（ヂユウツ）、女郎（ノスカイ）、支那人（アチヤ）、緣臺（バンコ）。

「耶馬臺（やまと）言葉（ことば）に唐（カラ）なまり、

阿蘭陀附木（おらんだつけぎ）でひつつけた。

よか、よか。」

註、高麗鴉。黑と白の羽根のある鴉である。柳河地方だけにある鴉であらう。朝鮮から來たと云はれてゐる。

コブナエ。日本の古語か。

ワクド。琉球ではワクビと云ふ。これも日本の古語らしい。

ヂユウツ。阿蘭陀渡りか。

緣臺。バンクの訛りか、同上。

耶馬臺。筑後山門（ヤマト）は倭女王のゐた處だと云はれてゐる。

阿蘭陀附木。マツチの事を云ふ。

矢部のやん七

1

矢部のやん七さんに
何買うてあぎゆか。
紅か手のごひ。
豆しぼり。

2

矢部のやん七さんに
見せたかもんな、
祇園祭に
菱の花。

3

矢部のやん七さんが

華魁がよひ、
すゑは河童の
皿かぶり。

4

矢部のやん七さんよ、
泣こごつごたろ。
高麗鴉に、
明けの鐘。

5

矢部のやん七さんな
馬から來たが、
五嶋の權十どんな
帆で逃げた。

6

矢部のやん七さんが

嗅への土産、
メカジヤアゲマキ、
蟹の味噌。

7

矢部のやん七さんが
子どもの土産、
ててつぷつぷに
風ぐるま。

五嶋の權十

1

五嶋の權十どんな
なにば積んで來らした。
ザボンむらさき、
赤鯨。

2

五嶋の權十どんの
お守りさまは
もとは伴天連、
海わたり。

一に御十字架、
二に波羅葦僧よ、
三にマリヤの觀世音。

3

五嶋の權十どんの
帆は風まかせ、
サンタ・マリヤで
神まかせ。

4

五嶋の權十どんな

梶とり酒よ、
いつも、とり梶、
左利。

5

五嶋の權十どんが
嶋原夜酒、
千々岩、天草、
寢て白む。

6

五嶋の權十どんな
伊達者でござる。
いつも赤兵兒、
裸船。

註、ハライソは天主教で天國のこと。

柳河河童で

自嘲

柳河、河童で、
三池、もぐら、
大牟田雀は
煤だらけ。
菜の花盛りは

よかばつてん、
瀬高狐が
すぐ化かす。

蟹味噌

1

どうせ、泣かすなら、
ピリリとござれ。
酒は地の酒、
蟹の味噌。

2

臼で蟹搗き、
南蠻がらし、
どうせ、蟹味噌、
ぬしや辛い。

3

酒のさかなに

蟹味噌噛ませ、
泣えてくれんの、
死んでくれ。

三潴と沖の端

1

俺家來て見ろ、
よかオンゴばかり、
七つ家八つ家で
倉ばかり。

誰が、いやばい、
櫨ん實ばかり、
高麗鴉が
鳴くばかり。

2

俺家來て見ろ、
よか酒ばかり、
鯛の濱燒、

鰡のチリ。

誰が、いやばい、
蟹味噌ばかり、
裏にやメクワジャの
殼ばかり。

保の雪

春はあけぼの

1

春はあけぼの
紫染めて、
不二は殿御の立ちすがた

2

裾は紫
頂上は茜
不二は蓮華の八つ面。

不二の高嶺に

1

不二の高嶺に
朝ゐる雲は
あれは雪雲、
風見雲。

2

不二の高嶺に
夕ゐる雲は
末は茜の
わかれ雲。

紅吹雪

1

天へ天へと
あの雪煙、
お山なりやこそ、
紅吹雪。

2

いとし焔か
焔の雪か、
不二は夜の明け、
紅吹雪。

3

雪の焔の

燃え立つ朝は
さぞやお山も
せつなかろ。

4

やるせないぞへ、
あの紅吹雪、
早やも後朝、
不二颪。

初花ざくら

1

不二の裾野の
初花ざくら、
様は木花咲耶姫。

2

不二の裾野の
一本ざくら、
いとしそさまも花盛り。

不二の裾野

1

不二の裾野と
吹雪の夜汽車、
何處に下りよう當も無い。

2

不二のしら雪
解けなば解けよ。
とても愛鷹、三嶋宿。

3

不二の卷狩、
夜明けの篝火、
今は速彈、戀の仇。

山北

早やも山北、
チラチラ、燈、
鮨は鮎鮨、
溪の月。

箱根越ゆれば

裾野の夜露、
不二は紫、
百合の花。

山じや

これが山じやと
すうと立つたお山、
さすがお不二さん、
山の山。

沼津

1

沼津、千本松、
ばらばら小松、
風が片吹きや、
片なびき。

2

香貫かはいや、
牛伏憂さや、
寢釋迦拜もか、
月待たうか。

武藏野の不二

1

心ぼそさに
背戸へ出て見れば、
不二がちよつぼり、
枯木原。

2

不二の遠見に、
火の見の梯子、
野良は火のよな
唐辛子。

芋ほげ

ここらあたりか

1

ここらあたりか、
御機嫌さんか、
軒に唐黍
青辛子。

2

ここらあたりか、
御機嫌さんか、
背戸に柿の實、
鵯のこゑ。

あひびき

あひびきしましよと、
丘まで
出たが。

欅ばかりが
さえざえと。

遠くで、かたこと、水ぐるま、
近くで、ちいぴい、鰐のこゑ。

落葉ばかりが
はら〳〵と
風に落葉が、
はら〳〵と。

風の鳥

合圖しさしよか、
鳥射ちましよか。
鳥は筒鳥、
風の鳥。

山へ出て見りや、
枯山ばかり。

里へ下りても
萱ばかり。

風の筒鳥

風の筒鳥
筒抜け鳥か、
飛んで行たきり、
逃げたきり。

落葉栗かよ

落葉栗かよ、
山田の畔に、
待てば薄陽も、
きえぎえと。
風よ、吹くなら

ひようひよと吹きやれ、
どうで、木がらし、
冬のかぜ。

いとし野山の

1

いとし野山の
薄紅すすき。

「ついたち二日は晝の月、
せめては、三日月宵なりと。」

早やも、穂に出て
エエソリヤ、そよそよと。

2

今は野山の
霜枯すすき。

「初夜後夜過ぎては曉の月、
せめては、二十日の月なりと。」

風にさわめく、
エエソリヤ、影ばかり。

北山時雨

1

榧の梢と檜の森は
いつも時雨にすくすくと。

「北山時雨がお好きなら
釣棹かたげて鮒つりに、

その鮒買ひましよ、いくらです。
一貫五百にまけておこ、
それでも高いと突つぱなす。」

今朝の、サイサイ、寒さは身に染みる。

2

欅林の鳥の巣見れば、
いつも薄陽にさえざえと。

「北山時雨がお好きなら
釣棹かたげて鮒つりに、
その鮒買ひましよ、いくらです。
一貫五百にまけておこ、
それでも高いと突つぱなす。」

早やも、サイサイ、日暮の鐘のこゑ。

鐘が鳴ります

鐘が
鳴ります、
かやの木山に。

山は
寒空、

遠茜。

一つ星さへ
ちらつくものを

なぜに
ちらりとも、
出て見えぬ。

野焼のころ

1

山は野焼か、
まだ春寒か、
逢はず歸るか、
夜のふけか。

2

野火のちよろり火
一山越して、
燃えて行たやら、
消えてやら。

3

野火の火立の

薄れた頃か、
明けの山鳥、
ほろと啼く。

草木瓜

山で寒いは
日の照る岩よ、
なまじ、草木瓜、
草もみぢ。

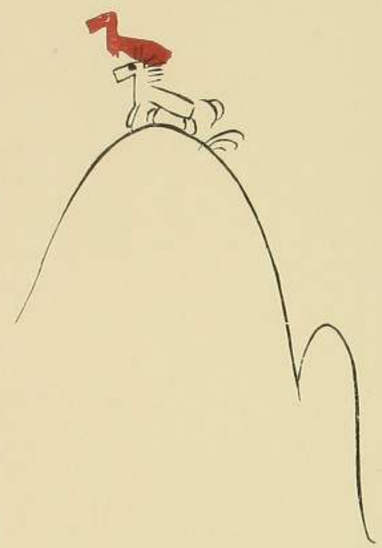
無宿者の歌

山に山猫、
穴には貍
春は菫の花盛り。

「かあ〳〵啼くのは禿鴉、
ちゆう〳〵啼くのは藪雀、

木では山藤、下り藤、
お里へ下りれば、犬の聲、
鷄やこけこに、鳩くう〳〵。」

どうせ、宿無し、羽根も無し、
何處まで飛ばりよか、
ええ、このどぶ、どぶ、どぶ鼠。



別れ雲

落葉松

1

淺間千ヶ瀧
からまつ原よ、
下は追分、
合の宿。

2

駒の沓掛、
追分手綱、
唄もいそいそ、
輕井澤。

3

風も吹かぬに

からまつ山は、
いつも松葉が、
はらはらと。

4

誰も通れど、
山道、小道、
寒むや、からまつ、
遠日射。

5

雨にからまつ、
谷間にや狭霧、
せめて面出せ、
かんこ鳥。

旅人の唄

1

今日も吹かれて
明日また何處へ、
うしろ向かるる
風の旅。

2

一人旅すりや、
つれないものよ、
空ははるばる、
笠ひとつ。

3

明けりや野あるき、

山川越えて、
暮れりや旅籠の
置火燵。

4

一夜泊りの
ゐろり火なれど、
寄れば燃えます、
枯ぼさが。

5

明日は明日はと、
幾山越えて、
いつが涯やら、
かぎりやら。

6

山のあなたの

權現さまよ、
山は幾山、
雲幾重。

伊那

1

信州、伊那の谷、
木瓜の花盛り。

春蠶かへそか、
(春蠶かへそか、)
婿とろか。

2

伊那は夕燒、
高遠は小燒。

明日は日和か、
(明日は日和か、)
繭賣ろか。

3

桑の夜霜に
ちらつく星は。

夫婦星かよ、
(夫婦星かよ。)
まだ明けぬ。

御嶽

1

空が近いか、
御嶽さんは、
いつも高風、
高吹雪。

2

七つ星見りや、
まだ夜は夜中、
雪の御嶽、
雪明り。

3

恵那の雪見て

御嶽見れば、
まだも遙かや、
越の雪。

4

木曾の御嶽
朝焼ござる、
着けて出やんせ、
蓑と笠。

諏訪

1

諏訪の明神、
おなさけござる、
氷張りやんせ、
また逢ひに。

2

上と下では
一目で通ふ、
篝火つけやれ、
諏訪の湖。

3

上げよ、鹿の角

七十四と一つ、
願かなへて、
諏訪の神。

4

戀のお守り、
法しよの兜、
守りたまはれ、
諏訪の神。

飛彈の高山

飛彈の高山、
吹雪か、
雨か。

せめて、美濃路よ、
「せめて、美濃路よ、」
柿日和。

寒雀

はやも、お目覺か、裏笹藪は、
今朝は北風、むかひ風。

向ひ風でも、はら〳〵、雀、
明けりや飛びましよ、聲立てて。

別れ霜

西伯利亞鶺の鳴くころふきけば、
早やも朝霜、別れ霜。

ちろりちろりと、ちろめく星よ、
外は朝霜、別れ霜。

山と山との

山と山との谷間なれば、
人も來もせず、音もせず。
千兩萬兩も日蔭の鉢よ。
鵂も來もせず、聲もせず。

山は雪かよ

1

山は雪かよ、
大寒小寒、
飛んで、飛んで來た。
豆小僧。

2

寒い筈だよ、
北山おろし、
逃げて、逃げて來た。
豆うさぎ。

夜寒

1

寒い瀨の瀨の
夜の谷越えて、
逢ひに來ました。
身も冷えた。

2

開けてくだんせ、
大寒夜寒、
飛んで來ました。
手も冷えた。

3

闇の瀬の瀬の
藤づるづたひ、
逃げて來ました。
身も冷えた。

冬の夜

曠原

外は吹雪じや、
まだ火を焚きやれ。
誰か來る氣な、
橇の鈴。

誰も來ませぬ、
吹雪の夜風、
沼の子鴨が
啼くばかり。

山溪

外は月夜じや、
雪沓打とか、
何か來る氣な、

笹の音。

誰も來ませぬ、
深山の夜風、
溪に子猿の
啼くばかり。

ちびの鳥

1

暗いうちから
わしや、山かせぎ。

「腰には水筒、山刀、
肩には鳥網、蓑と笠、

えさ〳〵えつさ、えつさつさ、
水濞かみかみ、九十九折、
北風ぴゆう〳〵、すつ飛んだ。」

これも誰ゆゑ、
アリヤコノ、ちび鵜。

2

かうと、網張りや、

もう、手のものよ。

「鳥屋にはゐろり火、自在鍵、
徳利に濁酒、山の薯、
ちろりや、〳〵、ちんちろり、
山鳥やほろ〳〵、雉子けん〳〵、
夜明の明星、ちんちろり。」

逃がしやせぬぞへ、
アリヤコノ、ちび鵜。

餓る山鳥

餓る山鳥、
ひよろ〳〵小雉子、
せめて長かれ、
尻尾でも。

その日ぐらしの

かりうど、わたしや、
せめて長かれ、
火繩でも。

嘘つき鳥

1

明日と云はずに
持て來てたもれ、
嘘の山鳥さんよ、
木つ葉金。

2

どうせ、正なら
持て來てたもれ、
馬の鼻杭、
牛轡。

どぎまぎ

馬が角振る、
さあ逃げ、牛よ。

ひいひん、そんならまゐりませう、
何處まで逃げたらようござる。
鹿のお宿が向にある。

馬賣り

泣けてしまへど、
いとしの黒馬よ。

明日は馬市、
汝賣りに。

仔馬見せよか、
蒸麥やろか。
なまじ、月夜の
きりぎりす。

渡り鳥

遠く鵜の
飛ぶ空見れば、
冬も末かよ、
ちりぐ〳〵と。
渡り渡りの

みな、風の鳥、
いつか吹かれて、
ちりぢりと。

菓の菓

これらは上州北甘樂、原富岡製絲所の女工たちの爲めに作つたものである。アリヤリヤンの歌と繰絲の唄は弘田龍太郎氏が作曲した。

アリヤリヤンの歌

鳩がなきます、タンクの上で、ヨウ、
かはい聲して、ほろほろと、
蠶うまれてまだ七八日、
春も暮れます、うつうつと。
　アリヤリヤン、コリヤリヤン、
アリヤ、リヤンソロ、リヤン。

月が出ました、川瀬の蘆に、ヨウ、
水にや河鹿もころころと、
お繭仕上げて、糸とりそめて、
夏も過ぎます、そよそよと。

アリヤリヤン、コリヤリヤン、
アリヤ、リヤンソロ、リヤン。

百舌が急きます、製絲所の屋根で、ヨウ、
赤い陽に來てきりきりと、
心ぼそさに出て空見れば、

秋も去にます、遠々と。

アリヤリヤン、コリヤリヤン、
アリヤ、リヤンソロ、リヤン。

雪がふります、寄宿の窓に、ヨウ、
障子あければちらちらと、
山の向うのあの故郷よ、
冬も盡きます、きえぎえと。

アリヤリヤン、コリヤリヤン、
アリヤ、リヤンソロ、リヤン。

繰絲の歌

1

箒しづかに索緒しやんせ、
繭は柔肌、絹一重。
わたしやお十七、花なら蕾、
手荒なさるな、まだ末通女。

2

いつもほどよい繰絲湯の繭よ、
すまず、にごらず、つやつやと。
惚れりやほどよく、熱いはさめる、
燒かず、はなれず、さらさらと。

3

ひとつひとつとつけたせ、繭は、

慾にからめば度外絲。
一人や一人に情增せ、戀は、
兩つどりすりや、義理知らず。

4

截附しやんすな、緣切らしやるな、
卷けば卷きつく繭の絲。
よりによりかけ、からんだ絲よ、
おまへ切れても、わしや切れぬ。

5

いとし小枠へ卷きとる絲は、
それは黃の絲、白の絲。
むしれむら絲、むらなく、きよく、
いつもむら氣じや身がもてぬ。

鳥かげ

1

繭を選り選り
薄陽の窓に
何か、鳥かげ、
氣にかかる。

2

緒絲をたてたて、
繰絲湯の繭に、
何か、陽が射しや、
氣がうだる。

3

蠶りにつけづけ、

蠶の絲、小絲、
何か、もつれりや、
氣がぢれる。

4

坐繰りからから、
隅こで一人、
何か、百舌が啼きや、
氣が急きやる。

5

絲を繰り繰り、
大枠、小枠、
何か、光れば、
氣が焦やる。

6

束は、つやつや

白絲、黄絲、
何か、ねぢれば
氣がしまる。

7

蛹棄て棄て、
小蓼のかげに、
何か、蟲啼きや、
氣がふさぐ。

卷末解說

一、本集に收めた三百八十章は凡て白秋小唄集以後の新作五百餘章の中から拔いたものである。

一、此等の民謠は昨年の十一月以降の感興で成つた。私はそれらを成るに從つて「中央公論」新年號に百章、「福岡日日新聞新年號」に三十章、「大觀」四月號に三百章を寄せた。その餘はまだ手元にある。

一、昨年末からの感興は民謠のみでなく、詩、長歌、短曲、童謠の數百篇をも私に生ませた。此集にはたゞその民謠體のものの大半を載せたに過ぎぬ。

一、昨年の十月末に、私は上州の原富岡製絲所の依頼を受けて、富岡町に行つた。さうして「アリヤリヤンの歌」「繰絲の歌」その他興に任せて、その品評會の手踊の唄二三を作つた。これが機緣に成つて、十一月に突然民謠の感興が湧き上つて來た。この集には收めなかつたが、『初冬短曲』の數章が出來、それから、この集の『別れ霜』の大半、『草木瓜』の全部、『風虹』の「鯛網」以下八章。『繭まつげ』の「わつしよわつしよ」を除き全部、『蟹味噌』中の「筑

後柳河」等凡てで百章のものが出來た。これらは同月二十六日から十二月三日に至る八日間の全創作中の民謡だけの分である。

一、『蟹味噌』の「筑後柳河」を除き、他の三十章は十二月の二十八日の夜に成つた。これらは「福日」に寄せた分である。

一、『椿日和』『パパヤの花』『風虹』の大半。『雪の焔』『別れ霜』中の「山は雪かよ」「夜寒」「冬の夜」。『桑の葉』中の「鳥かげ」等百五六十章は、本年一月の八日から十二日まで五日間の制作に成るものである。なほこの時にはこの集に収め無いが、外に新らしい試みのもの「小詰」とか「桑の薄陽」とか「磯部行」とか、小笠原のものでは「山中の壹寢」とか「山の枯草」とか數十章も一緒に出來た。

一、『南風の港』の約百章ばかりは同じく一月の十八日の一夜に成り、翌日整理した。この十八日にはこの外、葛飾の小唄數章、童謡等も同時に流れ出た。

一、頁の都合上、本集に收め得無かつた民謡が百章以上ある。これらは、主として短歌俳句の境地を民謡體で如何ほどの高さに上し得るかを試みたものが主になつてゐる。で、その以後私は私の歌集「雲母集」「雀の卵」等の歌で民謡體で表現し得られさうなのを研究的に改作しつつある。これは改めて

私論を添へて、同傾向のもののみを別冊として近々收輯刊行したい考でゐる。この中の一部は四月の「大觀」には發表してある。

一、這回の感興は可なり長く引續いた。私としては、私のこれまでの藝術生活に未だ曾て無かつた感興であつた。私はこれらの民謡と同時に成つた詩集(題名未定)、及童謡集「月夜の虹」をも別冊の「民謡集」とともに續々上梓する筈である。で、同時の感興がどういふ風に推移したかといふ事をこれらの數冊で知つていたゞけば有り難い。從て本集の民謡がその中にあつて、どれ程の存在の價値を示してゐるかといふ事、他との關係がもつとハツキリと解つていたゞくであらう。

※

一、本集の民謡は感興に乘じた一氣呵成のものではあるが、その根ざしは深い。大正の一年末から二年の一月まで、私は相州の三浦三崎に居た。その生活は短唱の『眞珠抄』とか詩集の『畑の祭』とか、歌集の『雲母集』とかになつたが、まだ充分に歌ひ盡せなかつた。それが民謡の形式を得て初めて十年振りで流れ出したのである。で、十年間それらは流れ出づ可き間隙を見出し得ずして、全く鬱積しきつてゐたのである。三崎から私は八丈嶋を經て小

笠原に渡つてその年の七月までゐた。小笠原の生活は或は散文となり、或は短歌の集『雀の卵』中の『輪廻三鈔』となつたが、どうにかして何かの形式で書いて見度かつた。それがその儘八丈の見聞とともに矢張り十年間蓄積してゐた。その他『蟹味噌』の如きも二三十年前に於ける郷里の思ひ出から得てゐる。かういふ風に、一二夜には成つたが、机上の遊びでは無い。永い永い間、自分の胸に巣くうてゐたものばかりである。

一、その他、『風虹』『草木瓜』『雪の焔』とかは最近の見聞から得たものである。

一、本集には主として南國風が多い。北國風としては『別れ霜』『草木瓜』の或もの、『桑の葉』等である。これらは時折の旅の見聞から得てゐる。私は今後北國風のものも書いて見度いと思ふ。南から北へ今、私の心は傾いてゐる。

※

一、今度は裝幀、カットとも私自身でやつて見た。『桐の花』の昔が思ひ出される。然し、何れも稚拙で甚だ赤面する。なほ、『パパヤの花』の畫は、あれはパパヤで無い。椰子の花である。題と添はないけれど小笠原の印象が出ればいいと思つて、そのまゝ用ゐた。（十一年三月十八日記）

日本の笛

著作者　北原白秋

合資會社アルス代表者
發行者　北原鐵雄
東京市京橋區銀座尾張町新地五番地

發行者　鈴木泉藏
東京市京橋區銀座尾張町新地五番地

印刷者　出雲寶太郎
東京市神田區今川小路一ノ三

製本　小川

印刷所　一番館印刷所

大正十一年四月七日印刷
大正十一年四月十日發行

發行所　東京市京橋區銀座尾張町　合資會社アルス
電話銀座二一九三番
振替東京二四八八八番

北後道書籍株

賣價金貳圓九拾錢也

北原白秋著　白秋小品　定價貳圓　書留送料拾五錢

山本鼎著　美術家の欠伸　定價貳圓　書留送料拾七錢

若山牧水著　靜かなる旅を行きつつ　定價貳圓五拾錢　書留送料拾七錢

中原悌次郎著　彫刻の生命　定價參圓五拾錢　書留送料拾七錢

三宅克己著　歐洲寫眞の旅　定價四圓五拾錢　書留送料貳拾七錢

高倉輝著 三部曲 女人焚殺 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾八錢

塚原健二郎著 ある迷宮の舞踏者 定價 貳圓六拾錢 書留送料 拾七錢

谷崎精二著 あ る 姉妹 定價 貳圓貳拾錢 書留送料 拾七錢

谷崎精二著 別 宴 定價 壹圓六拾錢 書留送料 拾參錢

宇野浩二著 美 女 定價 貳 圓 書留送料 拾七錢

北原白秋著 歌集 雀の卵 定價 參圓八拾錢 書留送料 貳拾七錢

北原白秋著 歌集 雲母集 定價 貳圓參拾錢 書留送料 拾七錢

與謝野晶子著 歌集 太陽と薔薇 定價 貳圓五拾錢 書留送料 拾五錢

北原白秋著 歌話 洗心雜話 定價 壹圓八拾錢 書留送料 拾五錢

古泉千樫編 子規歌論集 竹里歌話 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾八錢

北原白秋著 英國童謠 まざあ・ぐうす 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

北原白秋著 繪入童謠 とんぼの眼玉 定價 壹圓九拾錢 書留送料 拾五錢

北原白秋著 繪入童謠 兎の電報 定價 壹圓九拾錢 書留送料 拾五錢

三木露風著 繪入童謠 眞珠島 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

德永壽美子著 童話 薔薇の踊子 定價 壹圓八拾錢 書留送料 拾參錢

北原白秋著 白秋詩集 第一卷 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

北原白秋著 白秋詩集 第二卷 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

北原白秋著 白秋小唄集 定價 壹圓八拾錢 書留送料 拾參錢

北原白秋著 民謠集 日本の笛 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

北原白秋著 抒情小詩 わすれなぐさ 定價 壹圓八拾錢 書留送料 拾參錢

厨川白村註譯　英詩選釋　定價　貳圓八拾錢　書留送料　拾七錢

三木露風著　小抒情詩　生と戀　定價　壹圓八拾錢　書留送料　拾參錢

日夏耿之介著　詩集　黑衣聖母　定價　貳圓五拾錢　書留送料　拾七錢

室生犀星著　室生犀星詩選　定價　貳圓貳拾錢　書留送料　拾七錢

萩原朔太郎著　詩集　月に吠える　定價　貳圓五拾錢　書留送料　拾七錢

新詩會編　現代詩集　第一輯　定價　貳圓五拾錢　書留送料　拾八錢

牧神會編　牧神詩集　定價　貳圓貳拾錢　書留送料　拾七錢

上田敏選註　小唄　定價　壹圓八拾錢　書留送料　拾五錢

村山槐多著　槐多の歌へる　定價　貳圓五拾錢　書留送料　拾九錢

村山槐多著　槐多の歌へる其後　定價　貳圓五拾錢　書留送料　拾七錢

竹友藻風譯　波斯古詩　ルバイヤット　定價　壹圓參拾錢　書留送料　拾壹錢

竹友藻風譯　ヱルレエヌ選集　定價　壹圓參拾錢　書留送料　拾壹錢

堀口大學譯　サマン選集　定價　壹圓五拾錢　書留送料　拾壹錢

矢野峯人譯　シモンズ選集　定價　壹圓六拾錢　書留送料　拾壹錢

山宮允譯　ブレイク選集　定價　壹圓六拾錢　書留送料　拾壹錢